

Behind The Byline: With Eiko Endo, Reporter, The Oriental Times

(PR Newswire インタビュー)

(掲載先リンク)

[Behind The Byline Podcast: With Eiko Endo, Reporter, The Oriental Times Beyond PR Blog - PR Newswire APAC \(prnasia.com\)](#)

(和訳)

問：お名前とお仕事を教えていただけませんか。

答：私の名前は遠藤英湖です。大学を卒業後、中国北京に留学し、日本に帰国後、中国語新聞社『東方時報』に就職しました。仕事は主に、日中関係、在日中国人向け、中国に関心のある日本人向けの取材を数多く行いました。中国大使館、官公庁・企業などの取材、国会議員・芸術家・企業経営者のインタビュー等もしてきました。また、日本の総理大臣の在日華人華僑に対する春節メッセージを毎年新聞に掲載しました。

問：お名前の「英湖」は「イギリスの湖」という意味です。イギリスと何か縁があるのでしょうか。

答：私の父は日本の外交官でした。私が生まれた時、父はイギリスに駐在していました。イギリスには湖水地方があり、両親はその場所が大好きでした。私の名前は両親が尊敬する方がつけてくださったものです。今まで同じ名前のの人に会ったことがありません。

問：遠藤さんは日本の名門大学、慶應義塾大学卒業ですね。いろいろな選択肢がある中、なぜ記者の仕事を選んだのでしょうか。

答：中国語を使える仕事を探していたところ、縁があって『東方時報』に入社しました。私は人とコミュニケーションするのが好きで、文章を書いたり、調べたりするのも好きです。記者の仕事は私にぴったりでした。

問：記者として、普段の仕事はどんな感じなのでしょう。

答：月曜日は編集会議、火曜日と水曜日は取材、木曜日は入稿、金曜日は校正をするのが主なスケジュールでした。以前は、仕事が終わった後も、情報収集や人脈を作るために様々なイベント

やパーティにもよく出席しました。週末は休みでしたが、もし翌週にインタビューがあれば、準備のための資料を読むこともありました。

記者は、仕事とプライベートの切り替えがしにくいので、たとえばプライベートで参加したイベントも報道価値があれば記事にすることもあり、リフレッシュのつもりが仕事になることもよくありました。記者の仕事は時間に追われるので、精神的にも肉体的にもハードですが、その分やりがいも大きいと思います。

問：記者の仕事をする中、印象に残ったエピソードは？

答：特に印象に残ったエピソードは二つあります。一つ目は、香港のトップスター、アンディ・ラウの取材です。銀座のホテルで彼の主演映画についてインタビューしました。1対1でコーヒーを飲みながらのインタビューで、終わってから一緒に記念写真も撮ることができました。日本語、広東語、北京語が混ざったインタビューで、記事を書くのがとても大変でしたが、夢のような素晴らしい思い出になっています。

二つ目は、中国映画の巨匠、謝晋監督のインタビューです。10社と一緒に取材し、私は3番目の質問者でした。1社につき、質問は1回のみでした。私が『芙蓉鎮』の映画について質問すると、謝監督は嵐のような勢いで答えてくださり、スタッフが取材時間の終了を告げても、「構わない、私はまだ話し終わっていない。私はまだこの記者の質問に答えたい」と、長い時間話し続けて下さったのです。その時の感激は今でも忘れることはできません。

問：政府関係者、アーティスト、企業経営者など、様々な立場の人にインタビューされていますね。インタビューはどのように準備されるのですか？

答：インタビューは、相手の信頼を得ること、また、事前にどれほどしっかり準備できたかによって、同じ相手でも引き出せる答えの内容や話のレベルが全く違ってきてしまいます。その意味で、「インタビューは取材申し込みの連絡をした時から既に始まっている」と私は考えます。常に誠実で感じのよい態度で接し、取材対象に安心感と信頼感を持って頂くことがインタビュー成功の一つのカギです。それは同時に準備の一部でもあると思います。

内容的な準備については、まずは相手のホームページや過去のインタビュー内容などの研究、また、著書があればそれも読みます。アーティストの場合はその方の作品、たとえば映画、絵画、写真などもよく研究します。初めて取材する分野の場合、その分野の解説書も勉強します。基本的知識がなければ、インタビューのスタートラインに立てないと思うからです。

たとえば、歌舞伎役者の坂東玉三郎さんのインタビューをした時は、事前に歌舞伎の書籍を3冊購入し、週末に必死で勉強しました。一般的な質問だけでなく、新しい視点からの質問もできれば、相手も新鮮に感じてくださり、会話が盛り上がるので、とても良いインタビューになります。中国の映画監督が私との会話に興味を持ってくださり、「北京に来たら連絡をください。もっといろいろ話しましょう」と携帯電話の番号を下さった時は本当に嬉しかったです。

問：記者の仕事をする中で得たものは？

答：以前の私は「将来が見えない」ことを不安に思っていました。記者の仕事を通して「将来が見えないからこそ人生は面白い」という強い心を持つことができました。記者になる前の私は、将来アンディ・ラウや謝晋監督を取材できるとは思ったこともありませんでした。このような強い心を持てるようになったこと、また、仕事を通して得た経験や、出会った人々との繋がり、人生の大きな宝物だと思います。

問：記者としてどのようなプレスリリースでしたら記事を書きたくなるでしょうか。

答：私が記事を書きたくなるプレスリリースは主に3種類あります。

第一は、オリンピックや主要国の政治の動向など、時代の潮流の中で特に重要なニュース。みんなが関心ありそうな話題です。

第二は、映画や音楽、芸術祭など文化関係のニュース。文化交流は世界平和に大変重要な役割を果たすと思うからです。

第三は、まだあまり知られていない新しいニュースです。例えば、考古学での新発見や、科学の分野での新技術など、とても新鮮な話題に感じます。

問：記者には毎日リリースがたくさん届きます。PR担当者は、自分のプレスリリースを他と差別化するために何をすればいいのでしょうか？

答：まずは、記者も個人個人で興味が違うので、相手がどのような分野、内容に関心を持っているかをよく知ることが重要だと思います。もしその記者が求めているリリースが届けば、記事化される可能性が高くなると思います。

二つ目は、リリースのタイトルやキーワードにハッとするような表現や印象深い言葉を使うと、記者の興味をひきつけて効果的だと思います。

三つ目は、記者は忙しくて届いたリリースを全部読む時間はないので、簡潔な要旨もつけると良いと思います。要旨を読んで興味を持てば、リリース全文を読んでもらえると思います。

以上の三点を工夫すれば、自分のリリースを他と差別化でき、記事化される可能性も高まると考えます。

問：プレスリリースの役割についてはどう思いますか。

答：プレスリリースには、読者の需要に応えるだけでなく、社会に伝えたいこと、伝えるべきことを積極的にリリースする「啓蒙的」な役割もあると思います。ですので、私はプレスリリースの会社が独自に選び、世の中に注目させたい話題にも関心があります。インターネットは、これからますます「発信」の時代になりますので、積極的にプレスリリースして頂きたいと思います。

問：最後に、広報担当者が記者と良い関係を保つためにできることは何でしょうか？

答：よく連絡し、密接なコミュニケーションを保つことだと思います。コミュニケーションは記者のニーズを把握して役に立つ情報を提供できることにつながり、また、親しみの感情と信頼関係を育てることにもなります。よいコミュニケーションは結果的にリリースの採用（記事化）にもつながっていくと考えます。